令和6年度「防災ラジオドラマ」シナリオコンテスト

優秀賞　『久保さんのチョコ活』

登場人物

相川深雪（24）会社員　営業職　　長島菜々子

久保正人（25）深雪の同僚　総務部　斎藤晃一

野宮京香（34）深雪の先輩　　小泉まき

概要

都内で会社員をしている相川深雪は、ちょくちょくチョコレートを差し入れてくれる同僚の久保のある噂を耳にする。休日に久保を見かけた深雪は噂を確かめようと尾行する事に。久保がチョコを差し入れてくれる日は“地震の揺れがある日”という法則に気付いた深雪は彼の過去やチョコへの特別な思いを知る。チョコレートは久保の心の癒しであり、他者への気遣いの象徴だった。深雪はその思いを理解し、自身の防災意識が高まっていく。

深雪M　「きっかけは震度４の揺れだった」

SE　パソコンのキーボードを打つ音

SE　緊急地震速報のアラート音

深雪　「え？また？」

京香　「最近多いよね」

深雪M　「ここ最近細かい揺れが続いていて、今回も同じような揺れだろうと、油断していたら、足の裏からいつもとは違う力強い揺れが伝わってきた」

SE　オフィス内がガタガタと揺れる音

深雪　「きゃぁ」

深雪M　「とっさにデスクの下に身を潜めた」

SE　物が落ちてくる音

深雪　「収まった…？」

SE　ガサゴソとモノを退ける音

京香　「相川さん、素早く隠れて大正解だったね」

深雪　「え、私のところだけ？」

深雪M　「私のデスク周りだけ、物が散乱していた」

久保　「営業部の皆さん、大丈夫でしたか？」

京香　「久保さん、結構揺れたわね」

久保　「そうですね、お怪我とかは？」

京香　「うちの部は特に問題なし、相川さんのところ以外は…」

久保　「これは一体…大丈夫でしたか？」

深雪　「棚の上から拡材（かくざい）が落ちてきちゃって、私は素早く隠れたので、大丈夫です」

久保　「拡材は普段からここにまとめて置いてあるんですか？」

深雪　「はい…。整理整頓しないと…とは思っていたんですが」

久保　「手が回らなかった？」

深雪　「忙しくて、杜撰（ずさん）に置いてしまってました」

久保　「地震のことを考えると、高いところに物をまとめておくのは危険です」

深雪　「でも、他に置くスペースがなくて」

久保　「相川さんのデスク周り、結構物が溢れているような気がします」

深雪　「言われてみれば…そうですけど」

久保　「もう少し不要なものを処分して、身の回りを整えてもらえますか？」

深雪　「不要なものなんて、ないんですけどね」

久保　「この、前期のプレゼン資料もですか？」

深雪　「これは、確かにいりませんけど」

久保　「揺れで物が散乱すると、導線が確保できない恐れがあります。
耳にタコかもしれませんが、日常的に整理整頓を！」

深雪　「はい、わかりました」

久保　「あと、これよければ皆さんで召し上がってください」

京香　「これ、今話題のチョコレートよね？いいの？もらっちゃって」

久保　「ええ、皆さんでぜひ」

京香　「相川さん、痛いところ突かれちゃったね」

深雪　「どうせ私はズボラで整理整頓できないですよ」

京香　「いじけない、いじけない。久保さんもさ、総務部として、ピシッと言わないといけなかったのよ」

深雪　「でもあんな詰めるような言い方しなくても！」

京香　「はい、食べな」

深雪　「悔しいけど、このチョコ、すごくおいしい」

京香　「うーん、幸せ」

深雪　「久保さんってちょこちょこチョコ差し入れてくれますよね」

京香　「久保さんの噂知ってる？」

深雪　「噂？」

京香　「久保さんってデスクの引き出しの中にたくさんのチョコレートを隠し持ってるんだって」

深雪　「チョコを？どうしてですか？」

京香　「一説にはね、バレンタインデーに食べきれないほどチョコレートもらってるんじゃないかって」

深雪　「久保さんがですか？」

京香　「会社ではあんな地味な感じだけど、実は売れっ子ホストとか、人気の地下アイドルなんじゃないかって噂よ」

深雪　「そんな、まさかぁ…」

SE　雑踏

深雪　「あれ、あれは…」

深雪M　「休日。買い物に出かけると、久保さんを見かけた。初めて見る私服姿の久保さん。
先日聞いた噂のこともあって、気がつくと私は久保さんの後を付けていた」

SE　雑踏

深雪M　「久保さんは何軒かお店を梯子して買い物を済ませた。全部チョコレートのお店だった。
チョコレートはどれも見覚えがあって、会社で久保さんが差し入れてくれた物だった。
久保さんは自分で購入したチョコを差し入れている？どうしてわざわざそんなことを？
久保さんの手に持つ紙袋が増えるにつれ、私の中である仮説が浮かび、それを確かめたくなった」

深雪　「久保さん！」

久保　「相川さん？」

深雪　「私、ある事に気づいちゃいました」

SE　喫茶店の店内
SE　アイスコーヒーの氷の音

久保　「今日一日僕のこと、付けてたんですか？」

深雪　「そうです」

久保　「恥ずかしいな…もしかしてこないだきつく言った仕返しですか？」

深雪　「違いますよ。久保さん、会社で実はホストか地下アイドルなんじゃないかって噂されてるんですよ」

久保　「僕がですか？どうしてそんな噂が」

深雪　「チョコレートです。女の子から食べきれないほどもらってるんじゃないかって」

久保　「そんなわけないじゃないですか。チョコだけでそこまで妄想されるなんて…」

深雪　「でも私、わかっちゃいましたチョコの法則」

久保　「え？」

深雪　「久保さん、地震があった日にチョコレート差し入れしてくれてますよね。最近多かった
小さな揺れの日はキスチョコ。こないだの震度４の時はちょっと高級なチョコレート。
すごく美味しかったです。どうですか私の推理？あってます？」

久保　「あまりバレたくなかったんですけどね」

深雪　「てことは…」
久保　「名推理です」
深雪　「久保さん、どうして身銭切ってそこまでしてくれるんですか？」
SE　氷がカランとなる音
久保　「僕、気仙沼の出身なんです」
深雪　「気仙沼…」
SE　波の音
久保　「僕が中学生の頃、震災があって、波が僕の生活の全てを飲み込んでいきました」
SE　轟々とする波の音
久保　「ある時、薄暗い避難所で毛布にくるまっていたら、差し入れがあったんです。
とても綺麗な箱で、蓋を開けると丸くて宝石みたいなチョコレートが入ってました。
そのチョコを一口食べた時、甘くて、苦くて、幸せだなって思ったんです」
深雪　「甘くて、苦くて、幸せ…」
久保　「最初は、そう感じた自分が本当に嫌でした。父ちゃんも、母ちゃんも、兄ちゃんもみんな
冷たい海の中を漂っているのに、自分だけ生き残って、チョコ食べて幸せだって感じてるなんて。
でも、その気持ちは間違いなく本当で、美味しくて、幸せで、悲しくて、糖分のおかげなのか、
これからどうやって生きていこうかって、そう思たんです」
深雪　「すごいね」
久保　「え？」
深雪　「チョコレートってすごいね」
久保　「僕にとってチョコは偉大です」
深雪　「だから、だったんだ」

久保　「地震があった時って、それが例えどんなに小さな揺れでも、心に不安な気持ちがよぎるじゃないですか。
そんな気持ちをチョコは和らげてくれるって、僕は信じています。
それに、意外ともつので備蓄食としてもおすすめなんですよ」

深雪　「久保さん、ありがとう」

久保　「え？」

深雪　「久保さんの、そのさりげないチョコ活、会社のみんなにすごく効いてると思う」

久保　「あ、このことは誰にも言わないでくださいね」

深雪　「え、でも」

久保　「いいんです、僕の密かな活動なので」

SE　パソコンのキーボード音

深雪　「よしっできた」

京香　「あれ？ずいぶん、片付けたわね」

深雪　「頑張りました！」

京香　「あれ、その靴どうしたの？」

深雪　「これは、地震が起こった時用のスニーカーです」

京香　「予備の靴みたいな？」

深雪　「私たち外回りって普段はパンプスですけど、いざという時のために
歩きやすい一足を用意しておいた方がいいかなって思って」

京香　「どうしたの？急に防災意識高まってない？」

深雪　「高めていきましょう、こういうのって伝染するものです」

京香　「私も、スニーカー用意しようかな」

深雪　「あれ、揺れてません？」

京香　「揺れてる」

深雪　「久保さん、来るかな？」

京香　「久保さん？」

深雪　「いえ、なんでもないです」

京香　「収まったみたいね、最近本当に多いわね」

深雪　「先輩、これ食べませんか？」

京香　「わぁ、かわいい飴ちゃんね」

深雪　「どうぞ」

京香　「それじゃ、お言葉に甘えて」

久保　「お疲れ様です」

深雪　「久保さん、お疲れ様です」

久保　「相川さんのデスク周り、綺麗になってません？」

深雪　「心を入れ替えました。整理整頓。不要なものは捨てる！」

久保　「これ、良かったらどうぞ」

京香　「今日は甘い物たくさんね」

深雪　「久保さん、私からも、良かったらどうぞ」

〈了〉